

研究結果

本研究は、日本の古代とりわけ十世紀後半から十一世紀前半にかけての過渡期的な時代の中で、女性たちはどうあるべきだったのかを、『源氏物語』という作品に描き出された女性のあり方を中心に考察したものである。

当時の文芸作品において『源氏物語』ほど、女性について多くのことを記述した作品はない。『源氏物語』では「女は～ものなり」「女は～よかるべき」「女というもの」などと云うように、女性に関する見解を多様な角度から述べさせているが、これらは当時の女性が社会的・経済的・宗教的に弱い立場に置かれ、男性に比べて不利な条件で生きていたことを伺わせるものである。女性に対するこうした固定観念や社会通念は、女性たちの心身の自由を束縛し、制約の多い生活を作り上げていたと考えられる。しかし、だからと言って、当時の女性たちがそうした社会状況に順応して、ただ単に流されるだけの受動的な生き方をしたわけではない。というよりも『源氏物語』では、女性たちをそのようには描いていない。例えば、第二部の紫上は、源氏に縋って生きるしかできない自己のあり方や生活について深く悩み、女性として自主的に生きることの困難さを吐露している。さらに、第三部の大君や浮舟などに至っては、自分の生き方を主体的に選んでいる。

揺れ動く緊張した時代の中で、女性たちはどうあるべきかという問いに対して、物語は、社会的に劣悪な状況に置かれていながらも、それに妥協して生きるというよりも、自己というものの意味を深く考え、いかに生きていくべきかを悩む女性たちを描き出して、その答えの一つとして提示したのであろう。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

「平安時代の女性たちの自己主張－源氏物語の「女」という語を中心に－」
金玉京
韓国日本文化学会
2008. 10. 25
建陽大學校

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「平安時代の女性たちの自己主張－『源氏物語』の「女」という語を中心に－」
金玉京
日本文化学報 第42輯
2009. 8. 31

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)